
海賊戦隊ゴーカイジャー NEW LEGEND

リスくん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

海賊戦隊ゴーカイジャー NEW LEGEND

【コード】

N2316S

【作者名】

リスくん

【あらすじ】

海賊戦隊ゴーカイジャー。新たな5人の戦いが始まる。

プロローグ・レジェンド大戦（前書き）

はい、みなさん、こんにちは、リスくんです。

ここ最近、更新が滞り気味で僕の作品を楽しみにして下さっている皆様に多大なご迷惑をおかけになっています。

その為、この度新たに以前より考案していた新小説を発表しようと思います（また懲りずに…）。

今回の小説は現在放送中の「海賊戦隊ゴーカイジャー」のり・イマジネーション版です。

この小説も今まで同様、作者・読者の皆様方にいろんな形で協力してもらおう形をとる小説です。

細かい説明は後書きにしますので、まずはプロローグをどうぞ。

プロローグ・レジェンド大戦

地球最大の危機、それはある日、突然に始まった…。

街

「お、おい、ありや何だ？」

ふと何気無く空を見上げた男性が何かに気づいて声を上げた。

「おい？空がどうかしたか？」

「変なヤツがいる…。」

ある者は怪訝そうな顔、ある者はその男に呆れ顔をしながら次々と空を見上げた。だが彼らも最初の男同様、空を見たまま動きが固まってしまうた。

それに合わせて一人、また一人、空を見てはまた同じように動きを止めていく。

「…ほんとだ、ありや一体何なんだ？」

人々が動きを止めてまで見る「何か」達、それは上空から徐々に姿を現し始めた。

もちろん鳥で無ければ飛行機ではない。

「それ」らはみな、異様な形状をしていた。言うなれば、「未確認飛行物体」、そう呼ぶのが最も相応しい物…。

「宇宙人…。」

誰からともなくその名前が声になって流れる。

それに伴って動きを止めていた人々がにわかに騒ぎ始める。

「う、宇宙人？ってことはあれUFOか？」

「は、初めて見た…。凄い…！」

誰もが見る初めての未知との遭遇、それによる歓喜と驚嘆に人々の心は盛り上がった。

だがそれが「悪夢」の始まりだった。

飛行物体が空を覆うまでに数を増やすと、その中の数機のハッチらしき部分が開き、そこから人に似た形をした無機質な怪人がチエーンに繋がれ、地面へと降り立った。

「ゴーツ！」

地面へ下ろされると同時に怪物達は奇妙な鳴き声（？）を発し手元から何か棒状の道具を取り出す。

「ゴーツ！」

怪物達は再び叫ぶと建ち並ぶビルに向け、道具に付いた…引き金を引いた。

その瞬間、怪物達の持つ道具…高火力の銃は火を吹き放ちビルに風穴を開けた。それに合わせて上空に静止していた宇宙船も下部を展開、砲塔をせり出しビームを放った。

たちまちの内に街が火に包まれ、辺り一面瓦礫のやまへと変わる。

だが変化があるのは街だけでは無い。

さっきまで宇宙船に驚嘆したり歓喜していた人々も、宇宙船の目的が「攻撃」と気づいた途端、我先にと逃げ始めた。

「スゴーツ！」

地上には更に青い体色をした新たな怪物が姿を現し、奇声を上げて暴れ始める。

「ゴーツ！」

怪物達の銃身が向くのはビルだけではない。

必死に逃げ惑う人々にも、怪物達は容赦無く引き金を引く。

冷酷な弾丸撃ち抜かれ倒れる人々、それに近づくもの、離れるものも新たな弾丸の餌食になった。

恐怖と痛みを叫ぶ声、業火に包まれ崩壊していく街と文明。

そう、それはまさに地獄絵図だった。

だが闇があれば光があるように、絶望の中にも希望が生まれる。

「ゴーツ！」

「スゴーツ！」

街を蹂躪し、笑うように唸る怪物達。

そこへ、

「待てい！」

どこからともなく声が響いた。

その声に辺りを見回す怪物達。

すると怪物の一体が瓦礫の奥に何かが立っているのに気づき、指差した。

それも一人ではなく、十、五十、否、百を超える戦士が立っていた。戦士達はそれぞれまったく違う形と姿をしていた。

ある者は動物を模した、またある者は飛行機や自動車を模したスーツを身に纏っていた。

ただ一点、戦士達には共通点があった。

それは全ての戦士のスーツが多くの「色」に輝いていたのだ。

赤、青、黄、緑、桃、黒、白…。

その中で中心に立つ赤いスーツを身に纏った戦士…アカレンジャーが右手を掲げ、怪物に向けて叫ぶ。

「宇宙帝国ザンギャック、この地球は貴様らの好きにはさせん！みんな、行くぞ！」

『おつー！』

アカレンジャーの号令に他の戦士達も叫ぶと、武器を掴んで怪物達へと攻め入る。

護星天使：ゴセイジャーのリーダー、ゴセイレッドは真つ先に前に飛び出すと武器・スカイクソードを振るい、怪物達を叩き斬っていく

「はああ、レッドブレイク！」
必殺の一撃が決まり爆発する怪物達。

「飛羽、返し！」
サンバルカン・バルイーグルの必殺技・飛羽返し。
食らった怪物達は崩れ落ちると一斉に消滅する。

ジャッカー・ビッグワンは怪物の攻撃を手持ちの杖：ビッグバトンで受け止めると、逆に怪物達に重い一撃を叩き込む。

隙が出来た戦士に飛びかかる怪物達。
だが戦士が攻撃されようとした瞬間、怪物達の胸に矢が刺さる。
アオレンジャーのブルーチェリーだ。

「ファイヤーインフェルノ！」
「破邪聖獣球！」
「ゲキワザ・巖巖拳！」
戦士達の技は次々と怪物達を吹き飛ばす。
怪物達よりずっと数が少ないにも関わらず力では圧倒的だ。

空から援護しようとする宇宙船。
だがその砲身を戦士達に向けようとした瞬間、一機が爆発して吹き飛んだ。

それと連続するかのように他の宇宙船も打ち緒とされていく。

戦闘機や戦艦、そして巨大な生物達の攻撃だ。

デンジマンの戦艦・デンジタイガー、ゴグルファイブの戦艦・ゴグルシーザーの砲撃、星獣・ギンガレオンや気伝獣・龍星王が放つ火炎が宇宙船を次々に破壊していく。

「ハウリングキャノン！」

「ブースターキャノン！」

地上でも戦士達の必殺武器が青い怪物達も吹き飛ばしていく。

「エンドボール！」

そしてゴレンジャーの必殺技・ゴレンジャーハリケーンが、

「パニツシュ！」

ゴセイジャーの必殺技・ゴセイダイナミックが怪物達を粉碎した。

しかしこれだけ戦っても敵は大勢力、未だに留まることを知らなかった。

7

「…かくなる上は。」

アカレンジャーは拳を握りしめると、全戦士に集まるように指示を下す。

そして全員が集めたのを確認し、ある指示を出した。

「みんな、スーパー戦隊・全戦士の力を合わせるんだ！」

アカレンジャーの言葉に全戦士は頷き、全員が全身に持てる限りの力を込める。

すると戦士達の身体から眩いばかりに光を放たれ、怪物達は目を眩ます。

そして戦士達は一斉に空へと飛び出す。

「ファイヤー！」

アカレンジャーのかけ声で戦士達の光は輝きを増し、辺り一面を包み込む。

「ゴーツ！」

「スゴーツ！」

その光に生き残った怪物達は吹き飛ばされて消滅、宇宙船もすべてが爆発して消滅していった。

こうして地球最大の危機は去った。

だがスーパー戦隊の戦士達は全エネルギーを使い果たし、戦う力を失った。

それから一年後、新たな戦いが幕を開けようとしていた…。

プロローグ・レジェンド大戦（後書き）

この小説はメイン5人の名前以外はキャラクター・ストーリーもほぼ一新する予定です（敵キャラはどうなるかわかりませんが）。それに当たって作者・読者の皆様にあることを募集します。

今回は「レジェンドキャラ」。

リ・イマジネーションに当たってこの小説でのレジェンド戦士には別の漫画のキャラクターを当てようと思っています（ボスやシャーフーは出そうと思います）。

そこで皆様方にはこちら。

マジレンジャー

デカレンジャー

ゲキレンジャー

ガオレンジャー

にキャラが合うと思った漫画・アニメ（あるいはオリジナルでも）などを教えてください。

僕的にも似ていると思った物を採用したいと思います（ただし僕がわからないものはボツになるかもしれませんorz）。

締め切りは特にありませんので感想、メッセージにいつでもどうぞ。ご協力、よろしく願います。

第1話「たった一人の宇宙海賊」(前書き)

お待たせしました！

いよいよゴーカイジャー・第一話更新です。

予想以上に長くなってしまった上、読みにくい場所もあると思いますが、とにかく読んでいただければ嬉しいです。

このシリーズは通常と趣向を変えまして、まず『海賊戦隊ゴーカイジャー』になるまでのストーリーを作者流に描いていく予定です。それでは早速どうぞ。

(なお、メインキャラは同姓同名の別人とってください)

第1話「たった一人の宇宙海賊」

宇宙

数多くの星が輝く無限の空間を進む赤い船、ゴーカイガレオン。その中にある一番大きな船室の中、一人の青年が椅子の上に寝そべっていた。

「ふ、あああ…。」

青年は重い目を開けるとひと欠伸し、ゴロリと寝返りをうつ。

第1話『たったひとりの宇宙海賊』

「まったく、暇だぜ…。」

そう呟く青年の名はマーベラス。ゴーカイガレオンを駆り、宇宙をまたにかけて旅をする冒険者のリーダー…『キャプテン船長』だ。

だがその大きな代名詞を持つてはいるものの、ガレオンには彼の他に乗員はいない。

マーベラスはただ一人、この船で『ある星』を目指しながら宇宙の旅を続けていた。

ただし、彼にはもう一人、いや一匹相棒はいる。

「宇宙見物も飽きたな…。」

気だるそうな表情でマーベラスがボンヤリしていると、彼の側に置かれた止まり木、そこから声をかけてくる者があった。

「そんなダルそうにしてる暇があったら、仲間でも探せば良いのに。あれじゃ『宝の持ち腐れ』って奴だよ!」

「んなこたわかってるっての。うるせえぞ、鳥。」

「鳥じゃないよ、ナビィだよ！」
マーベラスに『鳥』と呼ばれた者・オウムに似たロボットは羽根をばたつかせて不満そうに反論した。

このロボットの名はナビィ。ゴークイガレオンの乗員を助け、協力する『ナビゲーションロボット』で、マーベラスにとっては唯一の相棒だ。

しかしその愛嬌のある見かけの良さとは裏腹にやや口が悪い。

その上大層な肩書の割に肝心のナビゲートなどの能力は大雑把かつ曖昧で、マーベラスからの信頼も今一つであり、ナビィも普段から『鳥』呼ばわりする彼に良い印象を持っていなかった。

それでいてこの二人（？）が長くここまで付き合っていていられるのは、お互い似た者同士といえる面があるのと、もう一つ…『ある人物との約束』、それを守るために共に旅を続けているからであった。

ナビィにうるさく騒がれるのを払うと、マーベラスは部屋の壁際を見た。

そこには焦げや汚れにまみれた、もとは茶色かったであろう大きな箱が置かれており、その傍らには奇妙な形の四つの機械を納めた小箱が置かれていた。

「あれからもう半年か…。」
マーベラスの頭によぎる光景…。

爆発の風や炎が舞う中、銀や青の体色の怪人達と戦いながら、必死で戦う赤い戦士の姿。
それが爆風の中に飲み込まれていく…。

「マーベラス、マーベラス！」
ナビィに目の前で何度も呼びかけられたところでマーベラスは我に返る。

「どうした？」

「どうした、じゃないよ、そんな風にボンヤリだからいつまでたっても仲間が見つからないんでしょ！」

「だから、わかっているの。」

「わかってないってば。まったくマーベラスは…バツカじゃないの？」

「てめえ…。」

流石のマーベラスも口の減らない上に暴言まで吐いた鳥ロボットにキレかかった時だった。

急にガレオンの内部にけたたましい大きさの音…警報が鳴り出す。

同時に部屋の前方に設置されたモニターの映像も船外の星を映していた窓の画面から地図表示の画面へと切り替わる。

モニターにはガレオンを示す赤い点と、それに接近してくる複数の黒い点が近づいていた。

点が表示す名前は…『ザンギヤック艦隊』。

「大変、大変、こっちにザンギヤックの艦隊が向かって来るよ！どうする、どうする、君ならどうする！」

ナビィはマーベラスの腕から飛び出すと、慌てながら部屋中をバタバタと飛び始めた。

ザンギヤック艦隊

その中で唯一、色の違う戦艦から青い体色に巨大な腕が特徴の異形の怪物・下士官スゴーミンが指揮を執る。

「あの船は…賞金首の『宇宙海賊』の男の船か。」

スゴーミンはモニターに映るガレオンの姿を見ると、その視線を手に持っている茶色の紙に移した。

そこにはガレオンに乗っているマーベラス本人の写真と、『懸賞金・50万Z』の文字が大きく印刷されている。

「我が帝国の艦隊を何度も宇宙の藻屑にしたゴミめ…。俺達の艦隊で今度こそ引導を渡してくれる。艦隊、全速前進！」

「ゴーツ！」

スゴーミンの指示で銀色の怪人…兵士ゴーミンはそれぞれが操る船を前へと進めた。

「海賊が、ほえ面をかくがいい。」

スゴーミンはそう吐き捨て、嬉しそうにほくそ笑んだ。

だがしかし。

「…おもしれえ。」

『ザンギャック』の名前を見たマーベラスに変化が現れた。

目は気だるそうな疲れた目つきだったのが、生气とやる気に満ちた目に。

身体も力が抜けてだらけきっていたものから、まっすぐとした力の入った姿勢になった。

「ちょうど刺激が欲しかったところだ。何にも言わず、買ってやるぜ。」

マーベラスは子供の様な、それでいて熱さのある顔で嬉々として言う、コート掛けに掛けられた赤い衣装を身に纏った。

そして部屋を飛び回っているナビィを一瞥して、

「おい、鳥、怖いならその辺にしがみついてな。」

と鼻で笑って意地悪そうに笑うと、部屋を出て行った。

「え…、ム、ムムム、ムツカ〜！ひどいよ、ひどいよ！」

一瞬、茫然としたナビィだったが、すぐに目を赤く点滅させ、慌てる時以上に飛び回った。

『宇宙帝国ザンギャック』。

邪悪な皇帝の元、全宇宙の支配を目論む彼らは既に多くの星を、その軍事力を用いて制圧、支配し、逆らう者全てを滅ぼして順調に宇宙を我が物にしていた。

だがそんな彼らが唯一、思い通りに出来ないもの…それは『キャプテン・マーベラス』だ。

とある時、突然ザンギャック軍の前に現れたマーベラスは『とある力』を使って彼らの一艦隊と師団を壊滅させ彼らの侵略計画に初めての誤差を生み出した。

そのことに怒った皇帝の命令により、マーベラスの首に賞金が懸けられ、彼は宇宙全体で追われる身となった。

しかし本人はそんなことも気にも留めず、『気に食わない』、『面白そうだ』という理由だけでザンギャックに『喧嘩』を売り、そのことごとくを潰していった。

最初は小額だった懸賞金も今では50万。他の追われている反乱分子よりもはるかに高額になっていた。

今ではキャプテン・マーベラスは過去最大の反帝国勢力『赤い海賊団』の名のごとく、『宇宙海賊』と呼ばれるようになった。

「?ゴーツ、ゴーツ！」

「何、『宇宙海賊』の船が接近してくる？」

自艦のゴーミンの報告を受け、スゴーミンが窓を見るとそこには…先程まで離れていた場所で背を向けていたガレオンが、急に方向転換して艦隊に向かっていった。

「ほお、こちらに気づくとは流石だな。よし、こちらも攻撃開始だ。」

リーダー艦の指示を受けた艦隊の戦艦は展開、その場所から砲塔がせり出す。

「よし、全艦、撃てっ！」

そしてガレオン目がけて一気にビームの雨が降り注ぐ。

「へっ、まだまだ甘いな。」

操縦席に座る赤いスーツを身に纏った戦士…マーベラスは頭を包む

マスクの下で笑う。

『宇宙海賊』キャプテン・マーベラスのもう一つの顔…その名はゴ
ーカイレッド。
戦いに赴く彼の鎧であり、同時に『宇宙海賊』の象徴の姿だ。

マーベラスは陀輪を回すと、ガレオンの速度を上げビームの雨に飛
び込む。

「馬鹿め、血迷ったか！もっと撃ち込め！」

自殺行為ともとれる行為をスゴーミンが侮蔑し、艦隊からは更にビ
ームの雨が降る。

爆発が起き、その中に包まれるガレオン。

「ひゃ〜はっは、あっけなか…。」

勝利を確信しスゴーミン達は笑う…が。

何とガレオンはその形を崩すことの無いまま、爆風と煙から姿を現
した。

「な、何〜!？」

「もう終わりか？だったらこっちからいくぜ！」

ガレオンは艦隊の中に潜り込むと両側部に備えられた大砲・ガレオ
ンキャノンが火を吹いた。

放たれた砲弾は次々にザンギャック戦艦に命中、それを火の海に沈
めていく。

「え〜い、何をしてる！こちらも攻撃だ！」

ザンギャック側も攻撃をするが、そのほとんどは当たらず、当たっ
ても船の装甲を傷つけるにはいたらない。

「あいつは化け物か…？」

「これだけじゃねえぜ。」

マーベラスが操縦桿である陀輪を勢いよく回すと、それに合わせて
船が回転、船首についた刃が一閃する。

近付こうとしていた戦艦はその刃を避けきれず、真っ二つに機体を裂かれた。

もう一度、陀輪を回すと今度は前進、刃は団子の串のごとく戦艦を貫き、爆発させた。

「おのれ〜！」

気がつけば自軍の艦をほとんど落とされ、スゴーミンは怒り狂う。

「このままでは帰れん、いや帰るわけにはいかん！」

そう叫ぶと残った艦共々、一斉にビームで襲撃する。

「進歩のねえゴミばつかだな。」

マーベラスは焦ることなく、ベルトから自分の姿をした鍵…レンジヤーキーを取り出すと陀輪に差し込んで回した。

すると仕舞われていたガレオンキャノンが前へと迫り出し、敵の方向に向く。

「な、何だと？」

迫り出したキャノンは伸縮しながら一斉に火炎弾を放ち、敵艦をあつという間に蜂の巣にした。

そしてその爆発の中スピードを上げ、最後の艦・主艦目がけて突っ走る。

「こ、これが宇宙海賊…！」

スゴーミンが相対した相手の恐ろしさに気付いた瞬間、ガレオンの刃が艦の胴体を貫いた。

最後に巻き起こる大爆発、ガレオンはそこから堂々と飛び出していた。

「へへ、大したこと無かったな。」

マーベラスは変身を解くと、機嫌良く船室に戻る、すると。

「酷いよ、酷いよ、馬鹿にしちゃって！」

未だに怒っていたナビィが彼の頭にぶつかってきた。

「てゝな、何しやがる!」

「ふうんだ、知らない、知らない!」

「てめえ…!」

今度こそ、本当にキレかかったが。

またガレオンの警報が鳴り出した。

「何だ、まだいやがったのか?」

マーベラスはナビィから手を離すとモニターを見た。

「と思つたら、これかよ…。」

マーベラスはうんざりしたように呟いた。

モニターにはガレオンの全体図が映し出され、その後方動力部を示している辺りが真っ赤に光っていた。

これはガレオンの動力部のどこかにある不調、あるいは故障を示している。

「サブエンジンがいかれちゃったか。ザンギャックの野郎もやつてくれるぜ。」

マーベラスが指摘した部分…サブエンジンは船のメインエンジンを支える重要なパーツだ。

今回はその内、速度を上下するのに必要なパーツが故障をしていた。このままでも航行そのものには問題は無いが、支障が無いわけでも無い。

「ったく。おい、鳥、近くに船の修理が出来る星はねえか?」

「自分で調べりゃいいじゃないのさ、何でオイラなんだよ!」

ナビィは文句を言うが…それでも渋々、自分のコンピューターと合わせて調べ始めた。

待つこと数分。

「出たよ。この近くに『トリン星』って…。」

「荒れ地の星か。なるほどあそこなら資材が豊富だし、ザンギャックの目もあまり届かねえってわけか。」

「オイラが言おうとしたのに……。」
「マーベラスに先に言われ、ナビィは再びブツくれる。
気にせず、マーベラスは進路設定を『トリン星』にし、ガレオンを
向けた。」

どこか

大きなモニターの前に立つ影が、モニター越しに離れた場所にいる
スゴーミンと連絡をとっていた。

「また海賊か……。これで一体何度目というのだ？」

影は苦々しく呟くと、その大きな手を握りしめる。

「して、ヤツの現在地はわかったのか？」

「はっ、艦隊からの最後の信号から調べたところ、海賊の船は『ト
リン星』の方角に向かった模様です。」

「トリン星か……。あの星はならず者がいすぎて我が帝国ももて余し
ている辺りだな。ふむ、どうしたものか……。」

影は腕を組むと、部屋を歩きながらしばし考え込む。

「……あの様な星の地形に長けた行動隊長はいるか？」

影がスゴーミンに聞く、と画面にいたスゴーミンの側から、それと
また違った姿の怪人が姿を現した。

「貴様、名は？」

「はっ、レイゴクと申します。」

頭を下げた怪人・レイゴクに、影は、

「では聞くが貴様、海賊の首を取る秘策はあるのか？」
と聞いた。

「ハハ、秘策などなくとも我が手にかかれれば海賊の一人や二人！
レイゴクは胸を叩くと、嫌な声で笑ってみせる。

「ふ……。良いだらう。だが海賊はそう簡単には倒せんぞ。心してか
かれ。」

影はレイゴクを冷たく睨み付け、そう告げた。

「承知いたしました。」

レイゴクとスゴーミンがうやうやしく頭を下げるとモニターの映像が消え、通信が切れた。

『トリン星』

星そのものの土壌と照りつける日差しの影響でほとんど植物が育たない不毛の星だ。

古くから星に住む住民達は自分達の生活の為に他の星との交易を集中的に行うことにより、暮らしを安定させていた。

その影響からか星の近代化が進んだ現代でも様々な星との商取引を続けており、星の市場はいろんな姿をした宇宙人で賑わう。

その一方で治安は悪く、宇宙警察の目を盗んで宇宙犯罪者達アリエナイザーが密輸を行っている他、軽、重、問わずの犯罪が頻発している危険な星でもある。

市場

星の住人以外にも多くの宇宙人で賑わうこの場所では、日用品や食料、装飾品、果ては電子機器から兵器までと、星にいるエイリアン以上に様々な品が売られている。

星に降りたマーベラスはその中を回りながらお目当ての、ガレオンの部品探しに回っていた。

「さすがは商売の星だ、面白そうな店が並んでるぜ。それに……」
あちこちにチラリと目をやると、他の星では指名手配になっているようなエイリアンが大手を振って歩いている他、盗品や非合法な品を取引している姿がある。

それに加え、ザンギヤツクの支配力が弱いため賞金首のマーベラスの姿ですら見るものはいなかった。

「ありがてえが、張り合いがねえ。何かおもしれえことでもねえか。」

『何言つてんだよ。マーベラスの首を狙ってるのはザンギャックだけじゃないんだよ。あんまり目立つちゃ…。』

「黙れ、鳥。」

ナビィからのうるさい通信を切つてマーベラスが改めて市場の中を歩いていると、近くから騒がしい声が聞こえてきた。

「こんな盗品売るとは、いい度胸してるな…ババア。」

「ヒヒヒ、くだらねえことやりがつて。」

市場の一角、そこで四人のチンピラが母娘を囲んでいた。

「よお、アニキ、こいつらどうしやしようか？」

「決まってるんだろ？金倍にして返してもらうんだよ。」

「ふざけんな！こんなもんでも売らなきゃ生活できないんだ。第一、アンタ達も…。」

震える母親を庇って娘…少女はリーダーの男に反抗するが。

「あん？」

それが気に食わなかったのか男は青筋を浮かべると少女にビンタを張る。

「ヒヤハハ、てめえ、この人が何者か知らないらしいな。」

「そんなヤツはお仕置き、だな。」

チンピラ達は少女を囲むと、殴る、蹴るの暴行を振るい彼女を痛めつける。

「や、やめてください、お金なら…。」

「おっと、邪魔するなよ、すぐ払わなかったあんたが悪いんだ。」

止めようとする母親も、羽交い絞めにされ娘に近づくことを許されない。

見ている人々はひそひそと話しているものの、表立って彼女達を助けようとしなかった。

「あんだ達…の方が…」

暴行が一旦やむと少女はリーダーの男へと負けじと反論する。

「ふん…、その綺麗な顔が腫れ上がるまでやんな。」

「ウス。」

男の命令にチンピラ達は頷き、再び拳や足を振り上げる。

その時、一人の拳を誰かの手が受け止めた。

「何だ、てめえ。引っ込んでないと痛い目…。」

手を掴まれた男はそれを振り払うと、止めた人物に怒鳴る。

だがその途端、返事代わりに拳が飛び、男を吹き飛ばした。

男は市場の店の一つに突っ込むと、そのまま伸びてしまった。

「てめえ…。」

驚く母娘、チンピラ、怒る男の前に現れたのは…マーベラスだ。

マーベラスは一人を倒した拳を下げると、母娘達の前に出た。

「よお、おもしれえことしてんじゃねえか。俺も混ぜろよ。」

「ふざけた野郎だ。てめえら、やっちないな。」

チンピラ達は少女の周りから離れると、今度はマーベラスの周りに集まる。

「てめえ、この人が…！」

さっきの男はマーベラスにも同じような言葉を吐こうとするが、言い終わる前に飛び出した拳に吹き飛ばされる。

「長い。」

「て、てめえ！」

残った二人は拳を振り上げると、マーベラスに向かい来る。

まず大柄な男がマーベラスに拳を振り下ろす、がマーベラスは軽くかわすと腹に蹴りを打ち込む。

そして突進をかけてきたもう一人の男の顔面にパンチを叩き込んでノックアウトしてしまった。

母娘や先程まで見て見ぬふりをしていた周りの人々も気がつけば、その光景を唾然とした様子で見ている。

その中でも最も驚くのはリーダーの男だ。

「ほ、ほほお、やるじゃねえか…だが。」

男は焦りを必死に隠しながら、ポケットに手を突っ込む。

「これならどうだ！」

ポケットからナイフを取り出した男はマーベラスに向かってくる。

「へ、その程度か。がっかりだぜ。」

マーベラスはスツと横に避け、男の手からナイフを落とすと回し蹴りで男を蹴り上げた。

歯が数本吹っ飛び、唾液を吐くと男は近くにあったゴミ箱に『犬神家の一族』のように突き刺さる。

「おっと、いいところにあっただぜ。」

それを見てマーベラスはニヤリと笑った。

「ちよっ…アンタ…。」

ざわめく周囲に背を向けようとするマーベラスを、先程の少女が声をかけた。

「あん？」

「何で、助けてくれたの？」

「別に助けた訳じゃねえよ。」

助けてくれた理由を聞く少女、だがマーベラスはそれを鼻で笑うとことも無げに言った。

「俺はただ面白そうなことをしてるから来ただけだ。ま、つまらなかつたがな。」

マーベラスは伸びているチンピラを一瞥すると、再び少女達に背を向ける。

「とりあえず、今から船のパーツ探さなきゃなんねえんだ。じゃあな。」

すると少女から意外な一言がきた。

「船のパーツを探してるの？」

「ああ、でもてめえにゃ…「あるよ。「何？」

その頃、マーベラスにやられたチンピラ達がボロボロの風体で街中を歩いていった。

「くそ、イケメンの俺様の顔をこんなにボロボロにしゃがって…。」
中でも歯が吹っ飛んだリーダーの男が最も悲惨で、彼はマーベラスへの恨みを吐いていた。

とは言え、元は少女相手に暴力を振るっていたチンピラ達の方に非があり、彼らのケガも自業自得であるのだが。

男が子分を引き連れ、歩いていると、反対側から何やら別の一団が近づくのが見えた。

「ん？お、おい、アニキあれ！」

「あ、ありやまさか！」

そう、十数体のゴーミンと三体のスゴーミンで形成されたザンギヤツクの一部隊が現れたのだ。

支配力は弱くてもそこは傘下の星、彼らの姿を見た人々は自然と道を開いていた。

「ア、アニキ、奴らこっちに来ますぜ。」

「なーに、どうせ俺達みたいなチンピラ…。」

男は子分達をなだめていたが、何とも予想は外れ、ザンギヤツク部隊達は彼らの前へとやって来て、止まった。

「ハ…、偉大なる帝国の軍隊がこちらに何のご用で？」

弱者相手に威張り散らしていたのが嘘のように男は敬語で部隊にへこへこしていると、部隊の中から一人、ゴーミンやスゴーミンと違う姿の怪人が現れた。

謎の影から命令を下されていた怪人…行動隊長レイゴクだ。レイゴクは男の前に立つと横に立つスゴミンが持っていた茶色い紙を広げた。

「あゝっ、この男さっきの！」

見せられた紙…手配書の写真の顔に驚く男。

それもそのはず、そこにあつた顔はさっき自分達をボコボコにした男、マーベラスだったからだ。

「ほう、貴様、この男に会ったのか？」

「はい、俺達の仕事を邪魔した上に暴力まで振るつた悪党なんですよ。」

「ふむふむ…。それで、どこに行ったのだ？」

男の子恨み話などどうでもいいとばかりに適当に聞き流すと、レイゴクはマーベラスが向かった方向を聞く。

「えっと、確かジャンク屋のババアの家の方に…。ですからあちらの方ですかね？」

「そうか、ご苦労だな。」

行き先を聞けば十分と、レイゴクは停まっていた部隊に指示を出し、男が指差した方向、市場まで歩き始める。

「あ、あのすいません。」

「ん？」

だがその側から男に呼び止められレイゴク達は足を止める。

「確か、その手配書によれば見つけたヤツに『50万Z』をくれるはずでしたよね？」

「ん？あ、おお、そうだったな…。」

レイゴクは思い出したように言うと、右手を下に下げる。

それを見たゴミン達は手に持った棍棒を操作し、前に向ける。

チンピラの一団がそれを見て困惑する中、レイゴクは右手を上げ静かに告げる。

「やれ。」

その瞬間、ゴーミン達の持っていた棍棒、それがマシンガンに変わり一斉に火を吹いた。

「ぎゃっ！」

「ぐえっ！」

「がっ！」

思わぬ襲撃にチンピラ達は瞬く間に蜂の巣にされ、血まみれになりながら次々と死んでいく。

「な、何故…。」

「ん、まだ息があつたのか？」

全身血まみれになりながら虫の息で困惑する男を嘲るように見るレイゴク。

「ハハハ、お前みたいなゴミクズに大金を払うなんて馬鹿馬鹿しいだろ？だからその代わりさ。」

言いながらレイゴクは自らの懐から銃を取り出し、男の額に当てる。

「我が偉大なる帝国に殺されるんだ、それこそ一番の褒美だろ？」

「そ、そんな…。」

男の最後の呻きを聞くと、レイゴクは引き金を引いた。

「う、うーんふう。」

チンピラ達の屍を前にレイゴクが腰を伸ばして深呼吸していると、一体のスゴーミンが指示を仰いだ。

「とりあえずこの者共のおかげで海賊の居場所がわかりました。いかが致しましょう？」

「うーん、殺すのは簡単だけど一人じゃつまらねえな。」

何を考えているのか、レイゴクは腕を組むとしばらくブツブツ呟きながら悩む。

「…そうだ、ついでだから街の人間共も殺しちゃおう。」

「よろしいので？」

「いいんだよ、理由は適当に言っちゃえば。そうだ、海賊を匿って

いたからはどうだ？」

「なるほど、それならば？」

まるで遊びの感覚で言っているような冷酷な指示。

しかしスゴーミンもゴーミンも一人も迷わず、首を縦に振った。

「よし、決まりだな。まずは街に火を放つぜ。」

市場の隅、ジャンク屋。

助けた母娘…ユナとミラに案内され、マーベラスはこの店にやって来た。

「ウチ、あちこちから流れてきた古い機械とか修理して欲しがってるお客さんに売ってたんだ。だからお兄さんが欲しがってる物とかもたくさんあるよ。」

店の中には規格を問わず、数多くの種類の機械部品や簡単なコンピューターの類などが棚中に並んでいた。ミラはその奥に置かれた箱を引っ張り出し中をあさくる。

その様子を眺めているマーベラスに母…ユナが声をかける。

「あの娘は二年前に父親をザンギャックに目の前で殺されていますね。」

「ほお…。」

「それなのにあの子は、『お父さんの代わりにお母さんを守る』っていつも気丈に振る舞っているんです。…本当はつらいはずなのに。」

マーベラスはそれを聞いて、自分自身も過去、『あの時』の出来事を回想する。

火柱を上げる施設、そこから逃げるマーベラスとナビィ、そして追い詰められた彼らを助けた赤い恩人…。

「ねえ、ちょっと?」

そうしている間にまたも意識が飛んでいたようで、マーベラスが気がついた時には目の前にミラが立っていた。

「あ、ああ、わりいな。」

「も〜う...。」

ミラは持っていた箱をテーブルに置き、中に入っていた大きな機械を取り出した。

それこそマーベラスが探していた物、船のパーツだった。

「へへ、これだ。ありがたく頂戴するぜ。」

マーベラスは満足してパーツに手を伸ばす、がその手をミラは遮る。

「ちょっと。私は置いてある、とは言ったけど、タダであげる、とは言っていないわよ。」

「何、金を払うのか?んなこと聞いてねえぞ!」

「言わなくてもわかるでしょ!あんた常識無いの?」

「何?」

思わずケンカが勃発しかけた時だ。

突如、外から爆音や銃声、悲鳴が聞こえてきた。

「ヒャ〜ハツハ、燃やせ燃やせ、殺せ!」

火の海に包まれた市場の中、ゴーミン達が進撃、彼らの銃も火を吹き、更に焼いていく。

「ゴーツ、ゴーツ!」

狙うのは建物だけではない。

ゴーミン達は嬉々とした声を挙げ逃げ惑う人々の骨を棍棒で砕き、非情な弾丸で彼らの命を奪っていった。

その攻撃の対象に例外は無い。

女子供、老人問わず、目にした人間は次々と手にかかけられ、その屍に擦り寄る家族や仲間もその場で殺されていった。

「ハッハ、てめえらは我らザンギャツクの敵、『宇宙海賊』を匿い、俺達から逃れさせた！よって皇帝陛下の命によりてめえらを皆殺しにする。」

そう宣言するレイゴクの横に並ぶスゴーミン達も進撃、巨大な腕から火球を放つ。

「スゴーツ！」

「な、海賊、そんなヤツ、知らないし匿っても…ギヤア！」

反論する人々もまた、ゴーミンやスゴーミン達の餌食になる。

そうして地獄絵図が出来上がっていく中、レイゴクも銃や剣を振るい、人々を切り裂き、撃ち殺す。

「クク、たまらねえな、ゴミ共の悲鳴は！」

そこへ悲鳴を聞いてやって来たミラ。

彼女は辺りを見て思わず戦慄した。

街は激しく燃え盛り、無惨な死体が転がる地面をゴーミン達が蹂躪する。

「酷い…。」

「早く…逃げろ…。」

彼女の頭に父親の最後の姿、ゴーミンに全身を撃たれながらも必死でミラを逃がそうとする姿が蘇った。

「あつ…お父さ…イヤアア…！」

そんな彼女の叫び声を聞きつけ、レイゴクとゴーミンの一団が近づ

いてきた。

「何だ、まだ生きてる女がいたのか…。ちようどいい…。」
うずくまって震えるミラを見ると、レイゴクは手に持った血まみれの剣を握り、上へと振り上げる。

「やっぱ女の首を剣ではねるのが、最高なんだよな、ヒビ。」
まさに外道の言葉。

レイゴクは下劣に笑うと、剣を振り下ろそうとした時。

どこからか銃声が鳴り響くと、ゴーミンの数体が身体から火花を吹き出し、倒れる。

「な、誰だ!？」

突然の襲撃にレイゴクや部隊の一団、ミラが驚いてあちらこちらを見回すと、銃弾の飛んだ来た方向から、赤い銃を片手にマーベラスが真っ赤な衣装を翻し、彼らに向けて歩みを進めていた。

「ほう、貴様が…。」

レイゴクはその姿をしばし見つめると、手元の手配書と見比べ、目の前の青年が『宇宙海賊』と気づく。

「てめえ、何てことをしやがる…。」

マーベラスは銃を下ろすと辺りの状況、そしてスゴーミンに羽交い締めになれ、剣を突きつけられたミラの姿を見て、目付きを変えた。

「ゴーツ!？」

ゴーミン達が恐れおののくほどの、マーベラスの怒りの目。

しかしレイゴクはそれを見ても恐れを見せない。

それどころか血で汚れた刃を手元に擦り寄せ、醜い顔に下卑た笑みを浮かべる。

「ヒビヒ、さすがの賞金首も人間だな。この娘が傷つけられるのを見たくないと言うわけだな。」

レイゴクはそう言って、また剣の切っ先をミラに向け、その首元で

ゆっくり動かした。

刃が通った先から一筋の血が流れ、ミラは痛みと恐怖に目を閉じる。その姿を見せ、マーベラスが動いてこないことを確認すると、レイゴクは再度、マーベラスに告げる。

「よし、なら取引をしよう。お前が大人しく捕まるなら、生き残っている連中を見逃して撤退してやるよ。もし、断れば…。」

レイゴクはミラの首に当てたままの剣を深く当て、

「この小娘に限らず、街のヤツら皆殺しにするぜ。」
とマーベラスに聞かせた。

もちろん、街の連中を生かす気など全く無い。

レイゴクはマーベラスが前に来た瞬間、ゴーミン達になぶり殺させ、同時に残りの人々も殺すつもりだった。

死体であるうと、賞金は手に入る上、自分の大好きな殺戮劇を更に楽しめる。

マーベラスがその言葉に歩み寄ってくるのを見ると、レイゴクは自分の計画は完璧だと感じ、思わず笑みを浮かべる。

「は？お前、何言ってるんだ？」

マーベラスがこの言葉を呟くまでは。

マーベラスは顔に何の表情も見せずに銃…ゴーカイガンでゴーミン達に向け、また引き金を引いた。

「な!？」

ゴーミン達が倒れる中、深い計略を巡らせ、成功を確信したレイゴクも驚く。

「き、貴様、こここの人間共がどうなっても構わんと言うのか!？」

「ああ、構わねえな。」

レイゴクはミラに剣を突きつけるのを見せつけながらマーベラスを脅そうとするが、マーベラスの顔には一片の同様は無い。

「殺せよ。俺はまだこの星に来たばかりで、縁もゆかりもねえんだ。」

「マーベラスが告げた冷徹な言葉にレイゴク、彼は自分自身も気づかぬ内に冷たい汗をかいていた。」

「…だったら何故、我らの邪魔をする！」

レイゴクの問いに、マーベラスは懐から『あの』機械を取り出し、展開する。

「俺の買ひ物の邪魔をしたからに決まってるんだろ。」

そう答えを告げると、マーベラスは手元に小さな人形を取り出し、変形、鍵の形に変える。

「豪快チェンジ！」

マーベラスは叫びと共に、鍵…レンジャーキーを機械…モバイレーツに差し込み、キーを回した。

『ゴッカイジャー！』

それに対応して変形したモバイレーツを前に掲げると、鳴り響く電子音声と共に4つの光が放たれた。

光はマーベラスの身体、頭にスーツ、メット、そしてシンボルに姿を変えて彼の姿を赤い海賊の戦士に変えた。

「ぐぬぬ、やれ〜！」

レイゴクはここで初めての怒りの声を挙げると、ゴーマン達をマーベラス…ゴーマンレッドへと向かわせる。

「派手に行くぜ！」

マーベラスもゴーマンガンと剣…ゴーマンサイバーベルを唸らせ、ゴーマン達と衝突した。

「おおお！」

棍棒を振るって襲い来るゴーミンの一団、マーベラスはその一撃をかわすとサーベルでゴーミン達を叩き斬っていく。

「ゴーツ！」

そして遠距離から弾丸を撃ちつつ接近してくるゴーミンも、サーベルで弾を弾き、ガンの応酬で次々に撃ち倒していった。

「ゴーツ！」

そこを上から襲い来るゴーミン、だがその棍棒の一撃もサーベルに止められ、がら空きのボディにゴーカイガンが火を吹いた。

それでもなお、まだ数多いゴーミン達は、バラバラでは不利と判断し、連携を組んで攻撃を放ってきた。

「なるほど、悪くねえな。だが！」

マーベラスはその攻撃をサーベルで流し、ベルトから新たなキーを取り出し、モバイレーツに差し込む。

「豪快チェンジ！」

『アゝバレンジャー！』

新たな電子音声が鳴ると、マーベラスのスーツはゴーカイレッドから、爆竜戦隊アバレンジャー・アバレッドに変わる。

「行くぜ、ティラノロッド！」

マーベラスは新たに先端に恐竜の頭が付いた槍：ティラノロッドを出現させ、ゴーミンへと攻撃する。

「オラア！」

近くのゴーミンをなぎ倒し、マーベラスがティラノロッドを一体のゴーミンの眼前にぶつける、とロッドの先端の頭がまるで生きてるかのごとく、ゴーミンの頭を噛み砕き、食らった。

「ティラノロッド・サークルムーン！」

マーベラスはティラノロッドで満月の円を描くと、必殺の斬撃・サークルムーンで残ったゴーミンを一掃した。

「スゴーツ！」

今度はスゴーミン達の攻撃、三体編成からの腕からの火球がマーベラスに放たれ、彼の周りで爆発を起こす。

「おもしろえ！どんどん行くぜ！」

『ゲキレンジャー！』

新たなキーを差し込むと、今度はアバレッドから、獣拳戦隊ゲキレンジャー・ゲキレッドに姿を変えた。

「へへっ！」

マーベラスはスゴーミン達の新たな火球をジャンプでかわし、懐に飛び込む。

そしてその巨体のボディにパンチやキックを素早く叩き込んでいく。そして更に取り出した二本の剣・ゲキセイバーを合体、一本の剣へと変え、

「行くぜ、ゲキセイバー・波波斬！」

二体のスゴーミンを切り裂き、粉碎。

「ゲキワザ・砲砲弾！」

残った一体をゲキビースト・ゲキタイガーのオーラを放って撃破した。

「ぐう、おのれおのれおのれ！」

レイゴクは予想の遙かに上を行くマーベラスの攻撃に震えながらも、怒り狂い足を地面に叩きつけた。

「こうなれば…ふん！」

レイゴクは自ら剣を震い、ゴークイレッドに戻ったマーベラスを斬りつけるが、マーベラスはそれを余裕にかわし、キック、サーベル、ガンの連続攻撃を加えた。

「スゴい…。」

先程まで恐怖に心を折られかけていたミラや人々も、いつの間にか、『海賊』の戦いぶりを感嘆、歓喜の目で見守っていた。

「ぐう、だったらこれはどうだ！」

苛立ったレイゴクは銃を出し、マーベラスに向け強力なエネルギー

弾を放つ。

「お？」

マーベラスはすっ頓狂な声を上げ、爆発に飲み込まれる。

「ヒャ〜ハツハ、どうだ、今度こそ…。」

しかし、レイゴクの笑いも虚しく、爆風を吹き飛ばしたマーベラスは怪人に容赦無く弾丸を浴びせた。

「さてと、トドメだ。」

しかし、何を思ったか素早くマーベラスの前から飛び退いたレイゴクは、ミラを羽交い締めになると、マーベラスの前に出した。

「お前、俺の言ったことが…。」

「ああ、わかっているさ、撃てるなら撃ちな。」

言いながらレイゴクはマーベラスに横を見るように促す。

マーベラスが見ると、人々の中、ミラの母・ユナの姿があった。ユナは娘が人質になっているのを見て、震え上がっている。

「どうした、撃てよ、攻撃しろよ！」

「チツ。」

マーベラスは舌打ちすると、ガンとサーベルを下ろし、ミラの側へと近づく。

そして…彼女の首にサーベルを当てた。

悲鳴を上げ、卒倒しそうになるユナ。

ミラも震えながらマーベラスを睨み付ける。

「アンタ一体…何のつもり？」

「まったく、人質なんかになりやがって…。これじゃ落とす首が増えちまうじゃねえか。」

マーベラスはミラの首にサーベルを当てたまま、身も蓋もないおぞましい一言を平然と呟いた。

レイゴクはその様子を見て、また落ち着きが戻ったのか、不気味な

笑みでそれを見つめている。

「ま、だが、条件次第じゃお前を助けてやっても良いぜ。」
マーベラスはミラの首からサーベルを離し、自らの肩に当てると、
そう告げた。

「何よ！」

「アレ…あのパーツ、タダで譲るんなら助けてやるぜ？」

「は、こんな時に何言って「嫌なら良いんだぜ〜！」…！」
反論しようとする彼女に、マーベラスはふざけた口調でまたサーベルを当てた。

「アンタ、最低ね！」

「最高の褒め言葉だな。」

普通なら悪役と交渉役の間にくる言葉、それで二人の交渉はついた。

「わかったわよ、くれてやりゃいいんでしょ！」

「良いぜ！」

マーベラスはマスクの下で満足そうに微笑んだ。

「と、言うわけだ。大人しく倒される。」

再び自分に矛先が向いたことに、レイゴクは怒り、そして恐怖する。

「ふ、ふざけるな！この俺が…！」

剣を振り上げ飛びかかるレイゴク。

だがマーベラスは冷静にサーベル、ガンに付いたシリンダーを展開
すると二本のキーを差し込み、装填する。

『ファ〜イナルウェイブ！』

モバイレーツと同じ電子音声が鳴ると、サーベル、ガンに描かれた
シンボルが赤く光を放ち、刃、銃口にエネルギーを充填する。

「うおおおお…！」

「はあ！」

眼前に迫るレイゴクにマーベラスは光の光弾、そして斬撃を叩き込

んだ。

「ぬ、うああー！」

突進していた為、かわしきれず、レイゴクは二重に放たれた攻撃を受け…爆散した。

マーベラスは変身を解いてミラを見ると、嫌味な笑顔で笑う、ミラはそれを呆れ顔で見つめ、苦笑いを返した。

どこか

「期待外れだったようだな…。」

影はモニターに映る、『レイゴク・死亡』の表示を忌々しそうに消し、スゴーミン達がいる他の場の画面に変えた。

「公安部に連絡して、キャプテン・マーベラスの懸賞金を100万に上げる。そして直ちに捜索部隊を送れ。」

「かしこまりました。しかし100万と言えば…。」

「言わずとも良い。ただちに探せ。」

「はっ！」

スゴーミンが頭を下げると、画面はアウト、黒画面になった。

「海賊め…。」

数日後。

ガレオンの修理を終え、必要な物資を積み込んだマーベラスは出発の前、最後にトリン星の地を眺めていた。

「マーベラス、何してんのさ、もう出発するよ。」

「黙れ鳥、俺が船長だ。」

そこへガレオンの近くに人間…ミラがやって来た。

「よお、どうした？」

「最後に一言、言っとこうと思ってた。」

「一言？」

怪訝な顔になるマーベラスにミラは、

「オオバカヤロー！」

と思わず彼がひっくり返るような叫びをぶつけた。

「チツ、お礼を言ってくれんのかと思ったぜ。」

「そんなわけないだろ！」マーベラスの愚痴を再び叫びが吹き飛ばす。

だが最後に、

「でもまあ、少しはありがと…、と言っておくわよ。」
の一言だけ、彼に聞こえない音量で呟いたのは秘密だ。

マーベラスは最後に憎らしい笑みをこの星に残すと、ガレオンを発売させた。

『宇宙最大のお宝』を目指して…。

第1話「たった一人の宇宙海賊」（後書き）

いかがだったでしょうか？

満足頂ければ何よりですが、至らぬところがあれば感想などで指摘していただけるとありがたいです。

レジェンド戦隊案はまだまだ募集中ですので、感想、メッセージにてどしどしお送りください。

今回はブルー編です、お楽しみに。

登場人物紹介は後程に、一応、マーベラスのイメージキャストは、柿原徹也さんです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2316s/>

海賊戦隊ゴーカイジャー NEW LEGEND

2011年9月18日15時55分発行